

異文化理解からみた短期留学生と 日本の大学での交流

隈本・ヒーリー順子（大分大学）
kumamoto@cc.oita-u.ac.jp

1. はじめに -オーストラリアの例を中心に-

アメリカは、従来から世界中から多くの優秀な留学生を集めるという点ではトップの座を占め、今もその座を固持しているが、近年、ヨーロッパとオーストラリアの大学が追い上げてきており、留学生獲得のためにめざましい国際戦略を展開させている。特にオーストラリアでは、90年代から連邦政府の高等教育機関への運営交付金の削減率と比例して、いわゆる授業料全額を支払う正規学生（full-fee students）が増えた。海外から一人でも多くの留学生を獲得することが「大学の生き残り」と捕らえ、すさまじい勢いで「教育産業（Educational Industry）」が発展していった。大学は留学生獲得のために、彼らの関心ある専門科目を充実したり、留学しなくても学生が住んでいる地で授業を提供できるようにしたり（off-shore program）、優秀な留学生獲得のために奨学金を整備したりして、様々な便宜を図り「大学の国際化」を推進してきた。それは、正規留学生数が増えることにより、留学生が払う授業料が大学の収入源として大きな割合を占めるようになってきたからである。具体的な数字をあげてみると、オーストラリアの高等教育機関で学ぶ留学生数は現在37万人（大半は正規学生）といわれ、出身国も190カ国と多様である。これはオーストラリアが留学生数では、米国、英国、ドイツに次いで世界で第4位に位置していることを意味している。1989年には僅か2万1千人の留学生しかいなかったことを考えれば、その増加がめざましいことは一目瞭然である。年率4.25%で増加しているといわれているが、2010年には、その数は38万6千人に達すると予想されている。そして、その経済的波及効果についていえば多大である。それは、オーストラリアの輸出収益額として125億豪ドルにものぼり、石炭、鉄鉱石に次いで「輸出収益額」では第3位を占めている。留学生が納める授業料も大学総収入の15%を占めている。因みに、ビクトリア州だけでも留学生数は10万に達し、彼らが落とす経済総額は、輸出収益額として35億豪ドル（約3850億円）になる。¹

留学生が留学先でその現地の学生と良好な人間関係が構築できるかどうかは、日本でも大きな課題であるが、この問題について多くの留学生を抱えるオーストラリアでも最近、メディアで大きく取り上げられるようになった。オーストラリアに留学している学生は彼らだけで固まり孤立する傾向があり、留学生とオーストラリア人学生との間には「大きい溝」（gulf）が存在すると指摘されている。²

オーストラリアの社会は、戦後、多くの国から移民を受け入れ多文化・多言語社会になったと言われるが、日常使用される言語は英語であり、社会の基盤は英国からの制度に基づいたものである。いわば、ヨーロッパ系の間人が主流となって構成する欧米的な社会にアジアからの留学生が問題なくとけ込んでいけるのかどうかということである。なぜなら、オーストラリアの留学生の約65%はアジアからの学生である。留学生とオーストラリア人の学生との交流が芳しくない原因の一つは、留学生の英語力が十分でないことが指摘されている。例えば、それが授業中のグループ・ワークなどで英語力のない留学生が入ってくることをオーストラリア人学生がいやがるという。留学生もまた、母語話者であるオーストラリア人学生の英語力を高く評価しておらず、彼らから学ぶものはないという。このように双方の間に存在するのは、表面的には単に英語力という語学上の問題のように見えるが、それよりもっと根深い問題、つまり文化を異にする人間同士の交流が学内だけでなく、大学の外でも円滑に行われていないことに起因しているのではないだろうか。³

日本では「留学生10万人計画」が達成され現在、約12万の学生が日本に留学している。しかし、最近、新たに「留学生30万人計画」が持ち上がり、大学の留学生受け入れ戦略のみ直しが必要となっている。これは、2020年までに留学生数を30万人まで引き上げようとする計画である。このような具体

的な数字が出てきた背景には、日本が海外、特にオーストラリアの高等教育機関による激しい留学生獲得状況が大いに影響しているように思われる。

既に述べたように、オーストラリアが抱える留学生とオーストラリア人学生との関係に関することは日本で同じように課題となっている。例えば、日本の国公私大学362校を対象とした報告書⁴によると、横田は「日本人との交流が進まない」ことを理由に留学生受け入れに躊躇している大学が67校もあると報告している。日本の大学で留学生教育に携わる我々も「留学生10万人計画」の達成について、様々な形で留学生教育の向上に努力してきた。また、「留学生30万人計画」が浮上して以来、大学関係者間で「留学生数の増加に大学はどのように対応していけるのか」という点で論議を呼んでいるが、留学生数の増加という点だけでなく「日本での留学の質」についても今後、目を向けていかなければいけないのではないだろうか。

今まで本学が提供する、協定校からの交換学生のためのプログラム評価は学期ごとに行ってきたが、実際に留学生が本学でどのような留学生活を送っているのか、特に、学生間の人間関係について詳細に調査したことはない。このような反省にたち、まず、本調査に先駆け予備調査として、2008年前期に本学で学ぶ交換学生を対象としてアンケート調査と面接を行った。本稿の目的は、この予備調査のデータに基づいて学生間の交流の様子がどのようなものであるのかについて考察する。

2. 大分大学で学ぶ短期留学プログラム (IPOU) 参加学生の背景

短プロとは、学生交流協定に基づいて協定校からの留学生を短期間（半年、あるいは1年）受け入れ、英語による授業を提供するプログラムのことである。大分大学では、短プロの英語名である **International Program at Oita University** の頭文字を取り、通常 IPOU と呼ばれている。（以下 IPOU）日本の大学では中国、韓国からの留学生が圧倒的な数を占めているが、IPOUに参加できるのは、国際交流協定に基づいて協定校から留学する交換学生で、主に欧米からの留学生が多い。留学期間は通常、最低1学期間から最長2学期間と決められているが、最近の傾向として、ヨーロッパからの留学生は事実上、5ヶ月間（1学期間）の留学が多くなっている。彼らは、全く日本語ができないか、僅かな期間しか履修していない学生で、日本語・日本研究の主専攻生ではない。他方、アメリカの学生の多くは、母国の大学で1年間から3年間程度の日本語学習歴があり、日本語・日本研究の主専攻生であり、留学期間は一年間の場合が多い。しかし、最近、後者の学生の中にも国際関係あるいは国際ビジネスが主専攻で、日本語が副専攻という学生も増加してきている。今後、ヨーロッパの協定校が増えることが予想されているが、日本語だけでなく日本文化・社会等の履修に関しても未習者は多くなるだろう。このように、本学の短プロ学生の背景も多様化している。特に、言語ということだけに限れば、来日当初、日本語がゼロか皆無に近い学生が5ヶ月間の滞在中、日本語で交流することはできないし、既習者である学生も11ヶ月の間にどれほど日本語運用能力をのばせるのか分からない。このような日本語運用能力と交流が円滑に進むか進まないかとの間には、なんらかの関係があるとみていいだろう。この点については4節のデータ分析でふれる。

3. 研究調査の目的・方法

今回の調査対象者は欧米からの短プロ参加者である。対象を欧米からの留学生に限った理由は二つある。（1）IPOU参加者の80%は欧米からの留学生である。（2）彼らは、全く日本語未習者であるゼロ初級者か中級レベルの学生である。また、日本に関する知識もほとんど皆無の学生か、自国の大学で日本語・日本研究を専攻した学生も含まれているというふうに二極化している。このような留学生が日本の大学で限られた留学期間中にどのような人間関係を構築しているのか。具体的には、大分大学の短プロに参加する欧米からの留学生が日本人との間で、そして他の留学生との間でどのように新しい人間関係を築いていくのかを明らかにしたい。その研究のための予備調査によって得られたデータを基に、本稿は「留学生の視点」からみた交流状況について考察する。

本研究調査の目的は前述したように、5ヶ月から11ヶ月という短い留学期間中にIPOUに参加する欧米からの留学生が日本人と、そして留学生間でどのように交流しているかである。研究方法は、アンケート調査とインタビューを用いた。このアンケートは異文化、日本人、日本文化等に対する留学生の態度や意識を明らかにすることが目的で作成されたものである。アンケート⁶調査後、個々の留学生にフォローアップ・インタビューを行った。

4. アンケート結果

今回のアンケート対象者は、欧米からの短プロ留学生11名（米国9名、欧州2名）で、本学での滞在歴は10ヶ月以上が10人で、4ヶ月が1人であった。10ヶ月以上の学生の中で1人の学生はIPOU終了後、さらなる日本語力向上のため研究生として本学で勉学を継続している。学生の日本語能力についていえば、3名（初級レベル1名と上級レベル2名）を除いて8名は中級レベルである。

4.1. アンケート Part A

以下の表1は「他の留学生、日本人学生、教職員に対してどの言語を使用するか」についてまとめたものである。

表1：他の留学生、日本人学生、教職員に対して使用する言語

	英語	英語・日本語	日本語	英語とそれ以外の言語を併用	計
アメリカ人	7名	3名	0	1名スペイン語	11名
ヨーロッパ人	6名	2名	1	1名ドイツ語	11名
中国人	2名	6名	2名	1名日本語・中国語	11名
韓国人	0	1名	10名	0	11名
日本人学生	0	6名	4名	1名ドイツ語	11名
日本人教職員	2名	6名	3名	0	11名

この表からも分かるように、米国人とヨーロッパ人に対しては、英語と日本語、その他の言語も併用すると答えた学生が数名いたが、英語だけと回答した学生が多かったのは予想どおりである。彼らにとってお互いにコミュニケーションする時に使用する言語は、やはり英語を主な言語として使用していることである。日本人に対しても彼らの日本語能力から考えれば、この回答結果もある程度の予想範囲である。しかし、同じアジア人留学生については、韓国人に対しては10名が日本語のみで英語はほとんど使わず、中国人には英語と日本語を使っている。韓国人学生は、日本語能力試験1級を合格の条件とする「二豊プログラム」に参加する学生で、日本語運用能力は非常に高い反面、英語でのコミュニケーション能力は大変低い。これに反して、中国人学生は英語でのコミュニケーション能力は比較的高い。それ故に中国人とは英語でコミュニケーションをはかる学生が多い。しかし、日本語がよくできる韓国人と日本語でどれほど内容のあるコミュニケーションが成立したかは不明であるが、韓国人との関係については、後節「5. インタビューのまとめ」でふれる。

次に、大分に来てからつくった新しい友人について友人は日本人か留学生かと聞いてみると、日本人と留学生両方と回答した学生が9名いたが、留学生のみと答えたのが2名いた。留学生だけと答えたことについては、インタビューの際確認してみると、これらの学生は内向的な性格の持ち主であり、特に親しくなるつもりもなかったとのことで、日本人の「知り合い」はできても「友人」にはならなかったという回答であった。

Part Aの最後の質問は、どのようなきっかけで友人を作ったかについて聞くと、以下のような五つの回答が得られた。

- ・ チューター、あるいは他のチューターを通して
- ・ 他の留学生を通して
- ・ 国際交流会館等でのパーティ
- ・ 同じ授業
- ・ クラブ/サークル

上記の回答からも分かるように、彼らが密接な人間関係を構築する場合は、やはり大学を中心とした場所、機会であることがわかる。地域での人間との交流は、学校、施設訪問などの機会はあるが、このような接触は交流を深めていくには時間的に限られたものである。友人という関係にまで発展するにはある程度の時間が必要となってくる。

4.2. アンケート Part B

アンケートの（Part B）事項については、アンケート内容を和訳したものとアンケート結果を集計したものを表2として、以下に示す。

- 1) 外国を訪問したときは、その国の言語で話したい。
- 2) 外国に住む場合は、英語が通じていても積極的にその国の言語を学ぶ努力をしたい。
- 3) 日本語を学ぶことは、日本文化を理解する上で重要である。
- 4) 日本語を学ぶことは、日本人グループと自由に活動する上で重要である。
- 5) 日本語を学ぶことは、いつかいい仕事を得られると考えられるので重要である。
- 6) 日本語を学ぶことは、将来のキャリアに必要なので重要である。
- 7) 日本語を学ぶことは、いろいろな人と会い、日本語で話せるようになるので重要である。
- 8) 日本語には興味がないので、大学を卒業したら日本語学習は継続しない。*
- 9) 知っている日本語を使うチャンスがあれば、使ってみたい。
- 10) 日本人と会ったとき、初対面で日本語を話すことは恥ずかしいと思わない。
- 11) 大分に住むことは大変楽しい。
- 12) 日本人は他人の気持ちを思いやる人たちである。
- 13) 日本人はすばらしいといつも思っている。
- 14) 日本人は大変親切で寛大である。
- 15) 日本人は正直で信頼できる。
- 16) 日本に住むことは私にとっていい経験である。
- 17) 私は日本人と日本文化にいい印象を持っている。
- 18) 私は日本人についてもっと知りたい。
- 19) 日本人について知れば知るほど理解するのが困難になる。*
- 20) 日本人、日本文化について知れば知るほど好きになる。

表 2: アンケート（PART B）のまとめ

質問番号	5段階回答					計
	1	2	3	4	5	
1	9	2	-	-	-	11
2	8	2	1	-	-	11
3	7	3	-	1	-	11
4	8	2	-	1	-	11
5	4	6	1	-	-	11
6	2	1	1	3	4	11
7	8	2	1	-	-	11
8	-	-	1	1	9	11
9	4	2	4	1	-	11
10	2	4	3	1	1	11
11	6	4	1	-	-	11
12	2	4	5	-	-	11
13	1	6	4	-	-	11
14	4	3	4	-	-	11
15	4	2	5	-	-	11
16	11	-	-	-	-	11
17	5	4	2	-	-	11
18	6	3	2	-	-	11
19	1	-	4	4	2	11
20	2	5	3	1	-	11
計	94	55	42	13	16	220

注：被験者は11人。回答内容は5段階（1＝大いに思う—5＝全く思わない）である。

アンケートの Part B は 5 段階回答とし、1 から 5 まで選択肢がある。実施にあたって、それぞれの事項を読んですぐ、直感的に 1 [=大いに思う (strongly agree)] から 5 [=全く思わない (strongly disagree)] までの回答を一つ選択するよう指示した。集計の結果、1 (=大いに思う) と 2 (=思う) の肯定的な回答の選択率は 67.7% である。ただ、質問 8 と 19 (*つき) は内容設定の仕方に問題があり、筆者が意図したことと反対の結果が出てしまった。つまり、内容を否定した結果、集計上 4 と 5 になってしまったが、これらの回答の内容を解釈するとポジティブな回答である 1 と 2 であることがわかり、これを再度計算し直すと 75% になる。また、「どちらでもない」とする 3 の選択率は 18.6% で、否定的回答である 4 と 5 の選択率は 6.4% である。これらの数値は、欧米の学生達が概ね、日本語、日本人、日本社会に対して好感を持ち、肯定的な態度・意識を持っていることを示していると言えよう。

5. インタビューのまとめ

11 名の留学生にフォローアップ・インタビューを行ったが、彼らが大学で築いた人間関係どのようなものであったのかを探るため、以下の 5 項目を中心に自由に面接者に語ってもらった。

1. チューターの役割についてどう思うか。また、チューターとの間でバリアーを感じたことはあるか。
2. 学外で学生以外に日本人の友人、知り合いができたか、どうか。
3. 留学生同士の人間関係についてどうか。
4. 大分大学での日本人との関係についてどうか。
5. 大分大学の留学に期待していたことは何か。

インタビュー結果として明らかになったのは、2 点ある。まず (1) 欧米系の留学生の親交の輪は米国、ヨーロッパ人同士にとどまっているということ。(2) アジア人学生との交流は中国人 (香港を含む) とあったが、韓国人との交流はなかったこと。交流がないだけでなく、驚いたことに、欧米の留学生の多くが韓国人学生は排他的だと思っていたことである。その理由としてあげたのは、韓国人学生は韓国人だけで行動し、欧米の学生と交流することに興味を持っていないという。その一例として、同じ国際交流会館に住んでいても、韓国人がパーティを催すときは韓国人しか入れないが、欧米の学生が行うパーティには誰でも入れるという。

韓国人学生は日本語能力についていえば高いが、英語で欧米の学生と十分コミュニケーションできないことから欧米の学生との溝を更に深くしている感がある。反面、中国人学生は英語でアメリカ人の学生とコミュニケーションできるだけでなく、欧米の学生にとって中国人の考え方は、彼らに近く理解しやすいという。つまり、中国人学生は自分の考え、気持ちをはっきり言うが、韓国人は日本人と同じようにはっきり言わないという。今回、インタビューを実施してみて、初めてこのような見方をするアメリカ人学生が多いことが明らかになった。

表 3 は 2008 年前期の国際交流会館に在住する国別留学生数であるが、それを見ると、韓国人グループが一番大きく、この大きいグループであることが、彼らとアメリカ人グループとの交流に影響を与えているかもしれない。これに関しては今後、韓国人学生から直接事情聴取して調査する予定である。2008 年の 10 月には欧米からの新入生を多く迎え入れるので、国際交流会館の構成人員は大きく変わる。表 4 は後期の留学生数を表したものであるが、前期と大きく異なるのは、欧米系の学生が合わせて 22 名と最大のグループになっている。このような構成人員の変化がグループ・ダイナミックスの点から韓国人や、他の留学生との関係にどのような変化をもたらすのかは、次の調査に譲りたい。

表 3. 国際交流会館に在住する国別留学生数 (2008 年度前期)

国・地域	中国本土	香港	台湾	韓国	米国	欧州	合計
人数	10	2	1	17	7	2	39

表 4. 国際交流会館に在住する国別留学生数 (2008 年度後期)

国・地域	中国本土	香港	台湾	韓国	米国	欧州	合計
人数	5	0	0	14	11	11	41

4. まとめと課題

以上、アンケート Part B の集計結果について既述したように、肯定的な回答率は 75% を示し、否定的な選択率は僅か 6.4% であったことから考察すると、欧米からの留学生たちは日本文化、日本語習得への関心も高いといえる。フォローアップ・インタビューの結果からもこの点は確認できた。

欧米系の学生達の日本語能力が十分でないことが、ある面で日本人との十分な交流を妨げているといえる。これは学生達が学外の日本人との交流があまりないことにも反映している。また、日本人側にも問題がある。例えば、地方都市では欧米人というのは目立ち、彼らに話しかけてくる日本人も結構いるようであるが、単なる一過性の興味で学生に話しかけてくるようで、それが長く続く交流に発展しないようである。韓国人学生は日本語上級レベルの学生がほとんどであるが、欧米人との間で交流がないのは、まず、コミュニケーションする共通言語がないため意思の疎通が十分できないからである。また、欧米人、特に今回調査の対象となったアメリカ人学生は、中国人と比べて韓国人は欧米の学生と交流しにくいと考えている。この原因は言語以外の要素を含み、今後、韓国人との間で溝ができていくことについては、韓国人学生の視点からの聴取が必要になったが。詳細は次の機会に譲る。

日本人学生と親しくなるきっかけについては、クラブ活動などをあげている。事実、来日当初は日本文化に関係するクラブに入会することを望むが、早期に諦めてしまう傾向がある。日本人チューターと違い、外国人学生と接触したことがない、あるいは特に興味もない日本人学生と「日本的な方法で」人間関係を築いていくのは、センター内の状況とは違う。まさに「異文化試練」を乗り越えなければクラブ活動を継続できないからである。例えば、「つまずき」の原因になることとして、クラブやサークルで頻繁に行っている「飲み会」がある。飲み会参加は実際、随意ではなく、いやでも参加することが期待されているようである。「飲み会」に対して日本人と留学生の間には見解の相違があり、留学生は、日本人との人間関係がある程度できる前にやめてしまうことが多い。いろいろな困難に耐え、仲間の日本人から「受け入れられた」と思うまで活動を続けた学生もいるが、その留学生は他の学生とは異文化経験、性格上、違いがある。人生経験も豊富で「大人」であることが最後まで継続できたといえよう。

日本語の運用能力の向上には時間がかかる。5ヶ月しかない留学生にはどのような日本語が提供されるべきなのか。現況のカリキュラムでは、今の欧米系の学生のニーズに十分応えられていない。

国内外で留学生を対象とした異文化関連の研究が多く発表されている。日本でも 90 年代から田中等によって異文化状況下で日本の留学生のソーシャルスキルの獲得などに関する研究が行われている。今後、これらの先行研究を踏まえてどのような研究方法で本格的な研究に発展させていくかが課題である。

注

1. The Melbourne Age: 25-28 July 2008.
2. Op. cit.
3. Op. cit.
4. 『「岐路に立つ日本の大学—全国 4 年生大学の国際化と留学交流に関する調査報告—日米豪の留学戦略の実態分析と中国の動向—来るべき日本の留学交流戦略の構築」文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B）平成 15 年・16 年・17 年度調査 最終報告書』
5. アンケートの内容については文末の付録を参照されたし。
6. 謝辞：主にインタビューを行った同僚の南里氏と長池氏に感謝する。但し、アンケートの作成及びインタビューの内容についての責任は筆者にある。

参考文献

和文

隈本・ヒーリー順子、長池一美（2006）「大分大学短期交流プログラム（IPOU）の現状と今後の展望—大学教育の国際化推進に向けて—」『大分大学センター紀要第 3 号』

隈本・ヒーリー順子、長池一美（2006）「よりよい短プロカリキュラム構築に向けて-中規模地方大学の短プロの例を中心に-」『アジア太平洋地域における日本研究と日本語教育の変容と課題』第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム予稿:香港中文大学、pp. 90-95.

隈本・ヒーリー順子、長池一美（2008）「大学の国際化から見た短期留学プログラム-よりよいカリキュラム構築に向けて-」『アジア太平洋地域における日本研究（Japanese Studies in the Asia-Pacific Region）』:香港日本語教育研究会、pp.213-221.

田中共子(1990)「異文化におけるコミュニケーション能力と適応—ソーシャル・スキル研究の動向」『広島大学 留学生日本語教育』第3号、PP. 19-31.

田中共子、高井次郎、南博文、藤原武弘(1990)「在日外国人留学生の適応に関する研究（3）—新渡日留学生の半年間の於けるソーシャル・ネットワーク形成と適応—」『広島大学 留学生センター紀要』第1号、PP. 77-95.

横田雅弘（2006）『「岐路に立つ日本の大学—全国4年生大学の国際化と留学交流に関する調査報告—日米豪の留学戦略の実態分析と中国の動向—来るべき日本の留学交流戦略の構築」文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）平成15年・16年・17年度調査 最終報告書』

英文

Lassegard, James P.,(2005) “The Role of Peer –Paring in International Student Support: An Examination of Tutoring Activities at Universities in Japan”『留学生教育』第10号, pp. 47-60.

The Melbourne Age: 25-28 July 2008; Melbourne, Australia

付録

Questionnaire

Important Notice to International Students.

Attached you will find a questionnaire designed to investigate “How you have settled into Oita and how you have formed/form relationships with people you have met/meet here in Oita”. I should like to make it clear that the purpose of this inquiry are; (1) to find out how international students relate to other international students and Japanese people; (2)to help develop an enhanced programme for both international and Japanese students at Oita University. Your full cooperation is, therefore, greatly appreciated.

Please rest assured that all the material provided by you will remain **completely confidential**. The data obtained will be used **only** for the purposes mentioned above.

J. Kumamoto-Healey
Oita University

アンケート Part A

•Age: _____

•Gender: male / female (Please circle)

•Nationality: _____

•When did you come to Oita? _____

•If you agree to be interviewed, please supply **your email address or telephone number**:

- Q1.** Which language(s) do you speak to international students of the following nationalities? Write N/A if irrelevant.
 Americans _____, British _____, Europeans _____
 Koreans _____, Chinese _____,
 Other nationalities (**Specify**) _____
- Q2.** Which language(s) do you speak to Japanese students including your tutor?

- Q3.** Which language/s do you speak to staff members of Oita University?

- Q4.** Have you lived in foreign countries other than Japan? **Yes / No** (Please circle)
 If **yes**,
 a) which countries? _____
 b) for how long? _____
- Q5.** Had you visited/lived in Japan prior to coming to Oita? **Yes / No** (Please circle)
 If **yes**,
 a) where and for how long? _____
 b) in what capacity? _____
- Q6.** Have you made new friends since you came to Oita? **Yes / No** (Please circle)
 If **yes**, are they Japanese or international students? _____
 If **yes**, **how** have you made friends? _____

Part B

Instructions

Please provide your response to the following set of statements by circling one of the numbers on the scale: 1 (strongly agree); 2 (moderately agree); 3 (neutral); 4 (slightly disagree); 5 (strongly disagree). You are urged to be as accurate as possible since the success of this inquiry depends upon the accuracy of your response.

It should be noted that some respondents will circle number 5 (strongly disagree), others will circle number 1 (strongly agree), and still others will circle one of the others in between. Which one **you** circle should indicate your own feelings based on everything you know and have heard. Note that there is no right or wrong answer. The only important thing is that you indicate your personal feelings/attitude. Please give your **immediate** reactions to each of the following statements; don't waste time thinking about each. Give your immediate reaction after reading each statement. On the other hand, please do not be careless, as it is important that we obtain your true feelings.

Questions

- Q1.** If I were visiting a foreign country I would like to be able to speak the language of the people.
 strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q2.** If I planned to stay in another country, I would make a great effort to learn the language even though I could get along in English.
 strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q3.** Studying Japanese is important for me because it enables me to better understand and appreciate Japanese culture.
 strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q4.** Studying Japanese is important for me because it enables me to participate more freely in the activities of Japanese groups.
 strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q5.** Studying Japanese is important for me because I think it will someday be useful in getting a good job.
 strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q6.** Studying Japanese is important for me only because I'll need it for my future career.

- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q7.** Studying Japanese is important for me because it will allow me to meet and converse with more and a variety of people.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q8.** When I leave university, I will give up the study of Japanese entirely because I am not interested in it.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q9.** I try out the Japanese I know whenever I have a chance to use it.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q10.** I am not embarrassed when I first meet Japanese people speaking in Japanese.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q11.** I really enjoy living in Oita.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q12.** Japanese people are considerate of the feelings of others.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q13.** I have always admired the Japanese people.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q14.** Japanese people are very kind and generous.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q15.** Japanese people are trustworthy and dependable.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q16.** Living in Japan is really a good experience for me.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q17.** I have a favourable attitude towards Japanese people and their culture.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q18.** I would like to get to know Japanese people better.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q19.** The more I learn about Japanese people, the more difficult it is to understand them.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree
- Q20.** The more I learn about Japanese people and their culture, the more I like them.
- strongly agree 1 2 3 4 5 strongly disagree

Thank you very much for your cooperation.